文部科学省IB教育推進コンソーシアム
IB教育アドバイザー　好事例共有シリーズ　vol.15

2025年12月26日
上智大学
学事局　高谷 英克

国際バカロレア(IB)入試の導入目的と2026年度入試概要、IB生インタビュー

１．上智大学が国際バカロレア(IB)入試を導入した目的と制度趣旨・入試概要

上智大学では、年間を通じて、アドミッションポリシーに基づく様々な入試を実施しており、以前より実施していた海外就学経験者（帰国生）入試、外国人入試などの特別入試に加え、更なる「多様な入学者の確保」を目的として国際バカロレア(IB)入試を立ち上げました。

IBを活用した入学者選抜は、2012年度の国際教養学部入試（書類選考型入試）から導入しています。国際教養学部入試は、あくまでもSATやACTなど、グローバル基準のスコアを活用した入学者選抜における選択肢の一つとしてIBスコアを追加したものであり、IB教育プログラムの特徴を踏まえ、IB修了生のみを対象とした入学者選抜をスタートしたのは2017年度入試からとなります。

本学の国際バカロレア(IB)入試では、IB Final Gradesだけでなく、IB教育プログラム（課題論文 、批判的思考や幅広い知識の探究などの特色あるカリキュラム 、双方向・協働型授業等）を通じて培った、主体性や思考力、明確な目標を持って学ぶ意欲、語学力を含むコミュニケーション能力など、教科学力以外の要素も重視して選考しています。本入試を通じて入学した学生には、IB教育プログラム、そして上智大学での学びを通じて、多角的な視座や国際通用性、創造性を身につけ、将来、世界の福祉と創造的進歩に奉仕する変革の担い手となることを期待しています。

＜上智大学 国際バカロレア(IB)入学試験の制度趣旨＞
国際バカロレア(IB)入試では、国内外から多様な人材を受け入れるため、IB　Diplomaを取得済み、もしくは取得見込みの者を対象として、主体的に学ぶための知識や思考力、明確な目標を持って学ぶ意欲、語学力を含むコミュニケーション能力などを重視して、入学者を選抜します。

＜上智大学 2026年度国際バカロレア(IB)入学試験の制度概要＞
出願対象者を2つに分け、第1期、第2期の2回入試を実施しています。

【出願資格】
■第1期募集：
国内外のインターナショナルスクールや海外のIB認定校出身者、または卒業見込みの者で、出願時にIBDiplomaを取得済み、もしくは取得見込みで次の要件①と②の両方を満たす者。

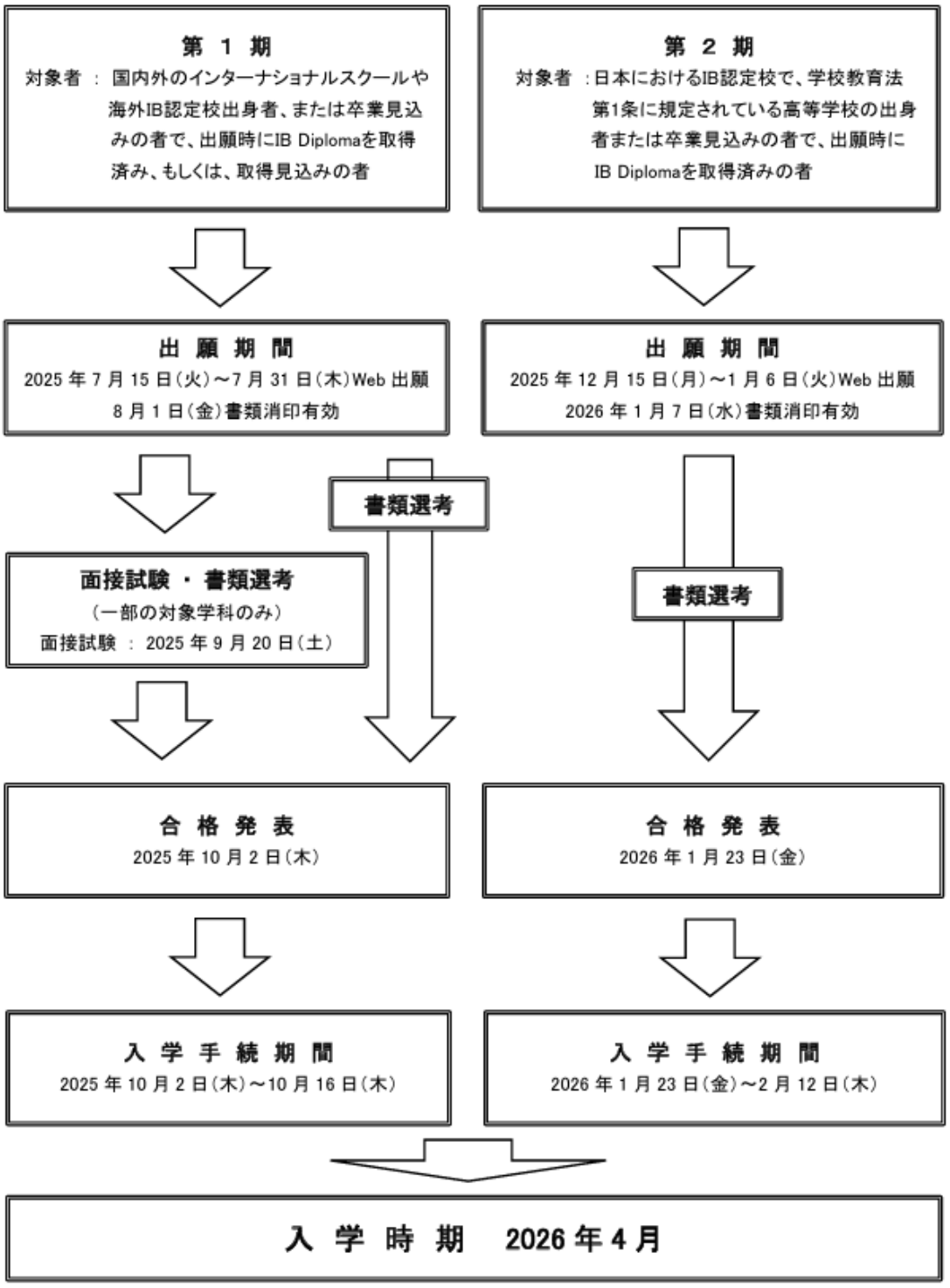
※IB Final Examを2025年5月までに受験した者は、Final Gradesでの出願とします。
※IB Final Examを2025年11月に受験予定の者（日本におけるIB認定校で、学校教育法第1条に規定されている高等学校は第２期募集のみ出願可）は、Predicted Gradesでの出願とします。その場合、2025年10月2日（木）の合格発表は条件付合格とし、Final Gradesの結果判明後、最終合格とする。IB Diplomaを取得できなかった、もしくは、条件付合格通知書にて学科が定めたIB Final Grades基準を満たさなかった場合は不合格とします。

■第2期募集：
日本におけるIB認定校で、学校教育法第1条に規定されている高等学校の出身者または卒業見込みの者で、出願時にIB Diplomaを取得済み（IB Final Examを2025年11月以前に受験）で次の①の要件を満たす者。

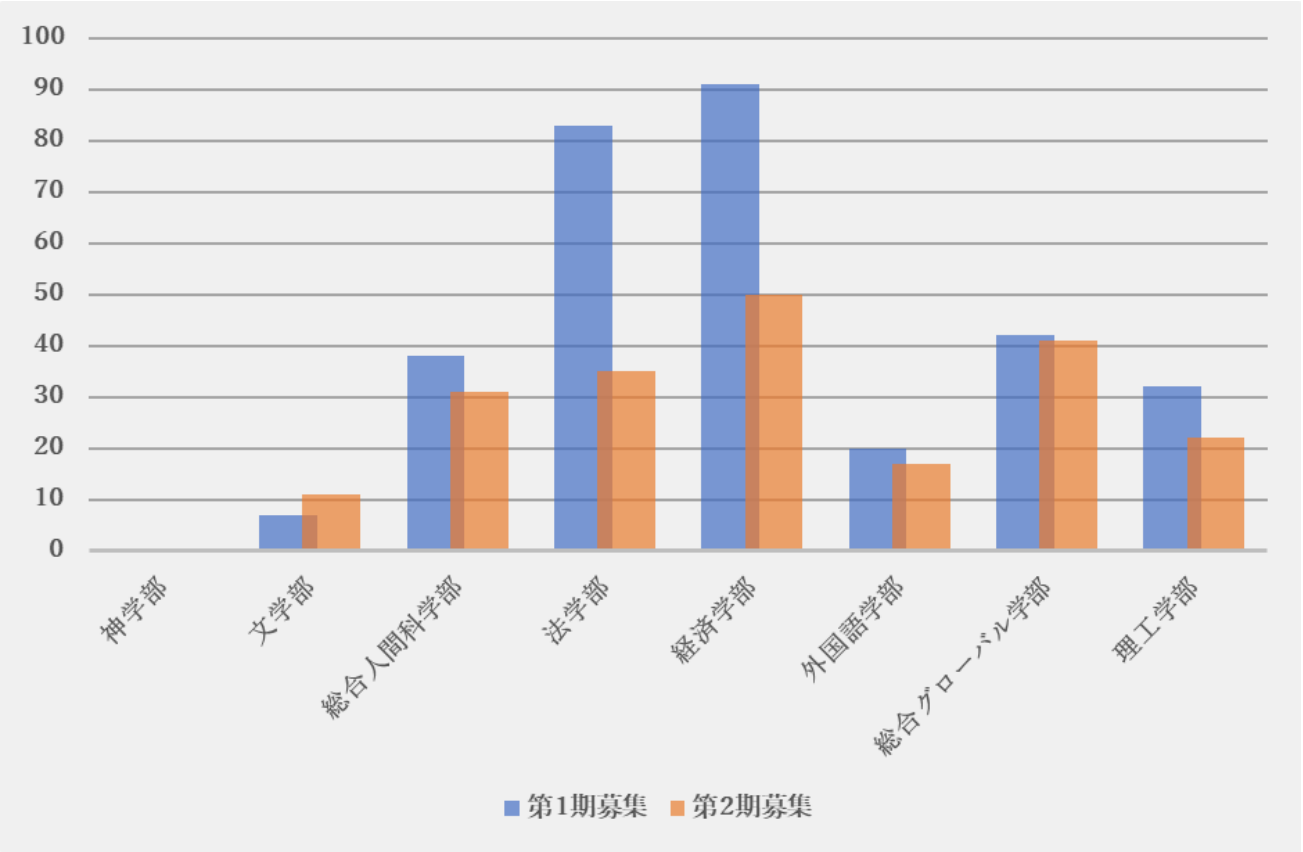
※IB Diploma取得見込みの者は出願できません。

【出願要件】
① 各学科の指定するIB科目を履修、および、成績基準を満たす者。
② 第１期募集については、①の要件に加えて、以下のいずれかを満たす者。
Ⓐ 日本語Aまたは日本語BのIB科目を履修した者（学科によって履修レベルや成績基準の設定有）
Ⓑ 日本語能力試験N1合格者
Ⓒ 日本の中学、高等学校にあたる６年の教育課程において、３年以上日本の教育制度に基づく学校に通っていた者

＜上智大学 2026年度国際バカロレア(IB)入試スケジュール＞



【参考資料】 上智大学 2017 年度～2025年度国際バカロレア入試 学部別志願者数 計



２．国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）を経て、上智大学に入学した学生にインタビュー

＜取材対象者＞
内山 慶人（ウチヤマ ケイト）
立命館宇治高等学校　2022年卒
上智大学 国際教養学部 国際教養学科　4年生

プロフィール：
幼少期をアメリカ・韓国で過ごし、立命館宇治高等学校にてIBDPを修了。大学では、個人でのフリーツアーガイドや、Apple Japan/Endeavor Japan/NEXT81にてインターン経験。
2025年、大学在学中に起業。現在、合同会社心動の創業者として、日本の伝統工芸品事業を支援する事業を展開中。

<u>Ｑ１．IBDPで最も印象に残る科目は何か。</u>

TOK（Theory of Knowledge／知の理論）です。物事を一つの正解に当てはめるのではなく、「その結論はどんな前提に立っているのか」「根拠はどのくらい信頼に足るのか」を問い直す姿勢を徹底的に鍛えられました。科学なら再現性と反証可能性、歴史なら一次資料の読み解きと視点の偏り、芸術なら価値判断の基準や文脈、領域ごとに“知る”の作法が違うことを、比較しながら学べるのが刺激的でした。
結論を急ぐより、問いの立て方や用語の定義、前提のずれを整える過程そのものが学びで、唯一の正解がないからこそ、視点を行き来するところが面白いと思います。TOKは、答えよりも“考え方の筋道”を磨く科目で、私の思考の癖をいちばん良い方向に変えていたと思います！

Q２．上智大学での学びや将来設計において、IB生として学んだことがどう活かされているか。

IBDPのLearner Profileの一つである【Inquirer (探究者)】が、自分の核になっていると思います。常に好奇心を持ち、問いを立て、問い続ける。この姿勢が、大学生活で一番役立っていると思います。
個人的にはInquirerの姿勢は、正解が一つに定まらない状況でこそ効力を発揮すると思っています。単一の正解が用意された教科学習と違い、社会には決まった答えも、隣で導いてくれる先生もいません。だからこそ、自分で限られた情報で意思決定し、次の問いをつくる力が必要だと考えています。
これには、探究心/好奇心を持って暗闇の中を走る力が必要で、これを、IBを通して高校生の時にかじっておけたことは凄く経験としては良かった気がします。

Q３．もう一度IBDPをやり直すとしたら、どのようなことにチャレンジしてみたいか。

もう一度IBDPをやり直せるなら、成績やテスト勉強よりも、自分の好奇心や探究心を徹底的に深めることに挑戦したいです。今の自分は、「頭の良さ」よりも「おもしろいと感じたものをどこまでも掘り下げる力」と「そこから実際に動き出せるかどうか」の方が大事だと考えています。IBDPの中でも特にCASは、まさにその力を鍛えられる場だったのに、当時は十分に生かし切れなかったと感じています。
やり直せるなら、まずCASの活動を「義務的な時間の消化」ではなく、「自分の好奇心を試す実験の場」として設計し直します。例えば、気になる分野のインターンや社会人へのインタビュー、学校外の団体と組んだプロジェクトなど、社会との接点を意識的に増やしたいです。その中で「なぜこれはおもしろいのか」「なぜこれは違和感があるのか」と自分に問い続け、好き嫌いや価値観を言葉にしていく時間をもっと取りたいと思います。
このように、もう一度IBDPに取り組めるなら、知識量を増やすことよりも、好奇心と探究心を起点に動き続ける力を鍛えることを最優先にします。そして、そのための具体的な実験の場としてCASを使い倒し、自分なりの関心領域や将来の方向性を、より早い段階でつかみたいと考えます。

Q４．今、チャレンジしていること、将来の目標について。

今現在、合同会社心動の代表として、伝統工芸品特化の越境EC/メディアと伝統工芸品を用いた空間デザイン事業に取り組んでいます！
【めぐり合わせで、心を動かす。】
自分は、心が動くほど人生は豊かになると信じています。その瞬間は、多くの場合、思いがけない「めぐり合わせ」から生まれます。だからこそ、人ともの、人と地域、過去と未来が出会う場を丁寧に設計したい。このミッションのもと、私は日本の伝統工芸の魅力を世界に伝えていきたい。日本の伝統工芸の背景（土地・素材・技・歴史）と作り手の信念を、正確で魅力的なストーリーとして可視化し、世界へ橋渡しします。日常の中に伝統工芸品との「めぐり合わせ」が増える導線をつくります。今日よりも明日が少しワクワクする。そんな世界を、日本の伝統工芸から作りたいと思っています！

Q５．IBDPに取り組んでいる後輩たちにメッセージ。

IBDPに取り組んでいるみなさんには、「好奇心を大事にして、いろいろなことにどんどん挑戦してほしい」と伝えたいです。成績やテストももちろん無視はできませんが、それ以上に大事なのは、「なぜ

か気になる」「おもしろそうだ」と思ったことを、自分から試してみる姿勢だと思います！

CASや課外活動は、そのための良い場です。ボランティアやプロジェクトに限らず、興味のある分野でのインターンや、大人に話を聞きに行くことなど、学校の外に出ていく機会を意識的につくってみてください。うまくいかないことがあっても、その経験から「自分は何が好きで、何に違和感を持つのか」が見えてきます。

IBDPの2年間は、知識を増やすだけでなく、自分の好奇心と探究心を試すための時間でもあります。「正解」を追いかけるだけで終わらせず、気になったことには一歩踏み出してみてください。その積み重ねが、きっと後から大きな差になります。